

浜名湖ボート事故から1年

娘の死癒えぬ両親

記 西野 友章

浜名湖（浜松市）で昨年6月、自然体験学習中だった豊橋市立章南中のボートが転覆、1年生の私の娘西野花菜（当時12）が亡くなった事故から、18日で1年。私たちは学校に図書などを寄贈したり、市に原因究明を求めたりしながら娘の死と向き合ってきました。だが、事故の風化や再発防止への不安は拭いられないままです。

同級生からの「通信」支え

今春、自然体験教室を引率した教員7人のうち5人が異動などで章南中を去りました。「せめて、花菜（の学年）が卒業するまでは、いてくれると思っていた」と私は話しました。私たちは昨年12月、いつも笑顔だった花菜を一人でも多くの人の心にとどめてもらうとともに、再発防止を願って、同中に書籍や楽譜、CDなど約270点を寄贈しました。これらは図書室で書棚に収められ、「花菜文庫」と名付けられました。

文庫には、学校側が誓いの言葉を寄せました。その原案は「浜名湖で13歳という若き命を失ってしまった西野花菜さん」。年齢が違っていましたが、「当事者意識の感じられない言葉に落胆しました」と私は振り返ります。

私たちは、豊橋市議会に対して事故の真相究明などを求めた請願書を1万6千人を超える署名と共に提出しました。昨年暮れに趣旨採択されました。ただ、市教育委員会は、一貫して訓練を実施した三ヶ日青年の家に一義的過失責任があると主張。「静岡の施設のプロに任せている中で、事故は起きた」との立場でした。

事故を受けて市教委は校外学習の安全確保の指針を作成しました。昨年11月に市議会に提出した原案では「教育活動は学校の責任において行われる」と明記されていましたが、

4月に公表された際にはその部分は削除されていました。担当者は「どんな場合でも学校の責任という曲解を招く心配がある」と理由を説明しました。

私は「施設に丸投げしていたから、学校側に責任がないというのはおかしい」と主張しています。悪天候にもかかわらず、施設職員が言うまま湖面に出た理由などを、月命日近くに訪ねてくる市教委幹部らに問い続けていますが、納得する答えは得られていません。

私は「時がすべてを癒してくれる」。その言葉の意味はまだわからない。光美さんは「娘と過ごした日々から離れていくのがつらい」。

そんな思いを抱えながら過ごす二人のもとに、2年生に進級した花菜の同級生の学級通信が届きました。タイトルは「34CO1」34人「全員で一つ」と書かれていました。34人中には花菜もいます。「同級生たちは、娘の命を学校に問い続け、ずっと友達だからねと言ってくれている」。子どもたちの思いやりが、夫婦の心の支えになっています。

【2011年6月18日朝日新聞参照】



検証 浜名湖ボート事故 上

中学生の死から1年

記 西野 友章

中学生ら二十人が乗った手こぎボートが強風と荒波にあおられ、立ち往生していた。船酔いで真っ青になった生徒らにはオールを漕ぐ力も残っていない。船上にうずくまり恐怖に耐えている。

知らせを受けた静岡県立三ヶ日青年の家の檀野清司所長らがモーターボートで駆けつけ、船と船をロープで結ぶ。岸に向けてえい航を始めてから五分後、船尾で監視していた所員が叫んだ。「転覆した!」

全員が湖に投げ出された。波間でもがく子、裏返しになった船にしがみつく子。「閉じこめられている人がいるっ」と声が響く。

雨がっぱに救命胴衣姿の檀野所長は操縦席から飛び込んだ。三人を引き上げたが、私の娘花菜は船内に残り残され、命を落とした。

「海好きなき子を増やそうとやってきたのに、逆の結果を招いた」。事故から一年を経ても、檀野所長の無念の思いは募る。大学時代に海に魅せられ、ダイビングの講師も務めてきた教育文化事業を手掛ける小学館集英社プロダクション（東京）で青少年の野外活動に携わり、念願の水上研修を行う三ヶ日の所長に赴任したのは事故のわずか二か月前だった。

経験不足 焦った救助

出港前の浜名湖は穏やかだった。湖面の平均風速は毎秒三・三メートル。マニュアルで所長判断を求められる毎秒八メートル以上には遠い。雨は降っていたが、所員から中止を求める声もなかった。しかし天候は急変した。二十回以上にわたる県警の任意聴取では、えい航から転覆、救助まで、その経過や判断を細かく問われる。「なぜそうした」「どう考えていたのか」と尋ねられるが「一つ一つの行動を取った理由をよく覚えていない」

同プロダクションは民間の指定管理者として、県教委から施設運営を引き継いだばかり。えい航作業は檀野所長も初めての経験で、頭の中は「緊張や焦り」でいっぱいだった。

国土交通省運輸安全委員会は昨年十一月に調査の中間報告を公表し、転覆の仕組みを明らかにした。

「雨で船内に水がたまった上、乗員が左に片寄った」「船が左に傾き、復元力が低下した」「その状態でえい航した」「水が激しく当たり、傾きが増幅」そしてボートは転覆した。

これらの指摘は檀野所長にとって「知らなかったこと」。「マニュアルも経験も足りないことが多かった」と認める。

運輸安全委の酒井郁夫統括船舶事故調査官は「誰も事故を起こしたくはない。良かれと思った判断が事故につながる」と強調する。どのような判断や対応が事故を招いたのか。それを解明し、再発防止を目指す安全委は、数か月後に詳細な報告をまとめる

【2011年6月18日中日新聞参照】



検証 浜名湖ボート事故 下

中学生の死から1年

天候判断

記 西野 友章

祭壇わきの壁に、真新しいセーラー服が掛けてある。愛知県豊橋市立の章南中学に入学したばかりの私の娘西野花菜（当時12）が着

ていた。遺影の中の花菜もセーラー服を着てほほ笑んでいる。

左胸のバッジはこの春、一年生から二年生に替わった。今も花菜の席を置いているクラスの友人が届けてくれた。

私は、今も花菜が「ただいま」と帰ってくる夢を見る。娘が好きだったバイオリンの音色が家中に響く。温かく軟らかい体を思い切り抱きしめてあげる。

「目覚めると、花菜のいない現実打ちめされる。時は悲しみを癒してはくれない」。事故から一年を経った今も、遺影の前にひざまづく父の目は潤む。

笑顔で手を振り、浜名湖での校外学習に出かけた花菜。だが、梅雨前線の活動が活発化し、現地では大雨、強風、波浪、雷注意報が出た。出航前から一部の生徒は「怖い」と感じていた。「校長も現地になぜボートを出したのか」。私はやり切れなさを募らせる。

雨が降り出したのはボート訓練開始の一時前半前。訓練を行う静岡県立三ヶ日青年の家では、教員が雨の影響を問い合わせたが、所員は「雨でもやる」と答えた。

所員らが大雨などの注意報を確認したのが一時間前。事務所のホワイトボードに書き込んだが、校長らには伝えなかった。訓練は予定通り始まり、午後二時半に船が出港して間もなく、激しい風と波に襲われた。

風雨 誰も異唱えず

日本ボート協会安全環境委員会の小沢哲史委員は「注意報の通りにならない水域もある。逆に、注意報が出ていなくても脅威は起こり得る」と、注意報を基準とした運用の難しさを指摘する。

静岡県教委は事故後、三ヶ日と同じく水上活動がある焼津青少年の家（焼津市）の安全対策を見直し、「注意報が一つ出れば活動は中止」と基準を厳格化した。このため訓練の三割が中止に追い込まれ、利用者からは不満も。

結局、県教委は基準を再び緩和せざるを得なくなった。

航空機や船舶などの重大事故を扱う国土交通省運輸安全委員会が手こぎボートの事故を調査するのは初めて。手こぎボートの訓練は、乗船者が力を合わせて漕ぐことで団結力や協調性を養う活動として普及している。今回は中学生が犠牲となった点も重視し、調査に乗り出した。

だが、天候判断について「一律の基準を定めるのは難しい」との声もある。昨年十一月の中間報告も天候判断には触れず、ボートのえい航から転覆までの経緯に絞られた。静岡県警の捜査もえい航に焦点を当てている。「訓練実施になぜ、誰も異を唱えなかったのか」という両親の問いかけに、答えは見つからない。

【2011年6月19日中日新聞参照】

